

銅沼に初めて定着した水生維管束植物と風景写真を用いた分布拡大時期の推定

首藤光太郎 (福島大学大学院共生システム理工学研究科)

黒沢高秀 (福島大学共生システム理工学類)

磐梯山麓銅沼で、ホソバタマミクリ *Sparganium glomeratum* (Beurl. ex Laest.) L.M.Newman var. *angustifolium* Graebn. とヨシ *Phragmites australis* (Cav.) Trin. ex Steud. の2種類の水生維管束植物の生育を確認した。銅沼は、磐梯山麓の北側の標高約 1120 m に位置し、湖水の pH が約 3.5 を示す酸性湖沼で、1888 年の磐梯山の噴火によって誕生し、1954 年の比較的小規模な山体崩壊により一部が埋まったとされる。同湖沼では、大滝 (1986) と山本他 (1975) によって、これまでに 2 回の調査が行われたが、いずれも水生維管束植物の生育を報告していない。そのため今回の調査で同湖沼での水生維管束植物の定着の初めて明らかとなった。ホソバタマミクリは、比較的大型で目立つ植物であることから、これまでの調査で見落とされたとは考え難く、最後に調査が行われた 1973 年以降に銅沼に定着したものと思われる。一方で、ヨシについては、生育地が湖岸の一部に限られていることから、これまでの調査で見落されてきた可能性もある。なお、裏磐梯高原のホソバタマミクリの生育地は、現在のところ銅沼に限られている。過去の報告を見ても、広木 (1976) が、噴火泥流上で詳細な生育地を示さず広義タマミクリ *S. glomeratum* を報告したのみで、磐梯山およびその周辺の植物目録を掲載している五十嵐 (1961)、馬場ほか (1988)、富田 (1997) や、裏磐梯高原の水生植物を調べた二瓶 (1991)、薄葉 (2002) などは、いずれもタマミクリあるいはホソバタマミクリを報告していない。

2002 年からほぼ毎年のように撮影された銅沼の写真と比較することで、銅沼の水生植物の分布の変遷の推定を試みた。銅沼は、裏磐梯高原の主要な観光地の一つであり、同じ場所から撮影された多くの写真が残っている。そこで、著者らが撮影した写真に加え、磐梯山噴火記念館、裏磐梯ビジターセンターなどから、近年の銅沼で撮影された写真を集めた。その結果、2002 年から 2015 年までにほぼ毎年撮影された約 15 枚の写真を集めることができた。これらの写真の比較から、ホソバタマミクリは、2010 年ごろから写真に写りはじめ、2014 年以降に磐梯山登山道からも一見して確認できるように分布を拡大したことが推定された (表 1)。一方で、南岸のヨシは、2002 年の写真に写っており、2002 年以前からすでに定着していたと考えられる。

表 1. 磐梯山麓銅沼における 2002 年以降に撮影された写真で写された範囲内での水生植物 2 種の変遷.

種名	ヨシ	ホソバタマミクリ
2002	○	×
2003	○	×
2004	○	×
2005		写真なし
2006	○	×
2007	○	×
2008	○	?
2009	○	?
2010	○	△
2011	○	△
2012	○	範囲外
2013	○	○*
2014	○	○
2015	○	○

○, 写真で確認可能; ×, 写真では未確認; ○*, 写真には対象地点が写っていないが現地調査で確認; △, 対象種と思われる株が確認できる; ?, 対象種であるか不明; 範囲外, 撮影された写真に対象地点が写っていない。